

平成 19 年度岩手県立総合教育センター

## 小学校英語活動の推進に関する研究

- モデルカリキュラムと校内研修プログラムの作成をとおして -

(第1報)

研究協力員

紫波町立日詰小学校

二戸市立福岡小学校

北上市立南中学校

教諭 日向 速人

教諭 山下 一幸

教諭 高橋 浩幸

岩手県立総合教育センター

教科領域教育室

三 浦 隆

上 柿 剛

## 《目 次》

研究目的	1
研究の方向性	1
研究の年次計画	1
本年度の研究内容と方法	1
研究結果の分析と考察	2
1 小学校英語活動推進に関する基本的な考え方	2
(1) 小学校英語活動の現状	2
(2) 中央教育審議会外国語専門部会の審議状況から	3
2 小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点	5
(1) 本県における小学校英語教育（英会話等）調査研究等の結果から	5
(2) 先行研究によるカリキュラムの分析	6
(3) 国の示す共通教材等との関連について	9
(4) モデルカリキュラム作成の視点	9
3 教師の実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件	11
(1) 英語活動指導者として、小学校学級担任に求められる資質（目指す教師像）	11
(2) 実践的指導力の向上を図るための教員研修の在り方	12
(3) 校内研修プログラムの内容	13
研究のまとめ	14
1 研究の成果	14
2 今後の課題	14
おわりに	
【引用文献】	
【引用 Web ページ】	
【参考文献】	
【参考 Web ページ】	

## 研究目的

進展する国際社会のグローバル化等の課題に対応するため、小学生の柔軟な適応力を生かして、小学校における英語教育を充実することが求められている。文部科学省が実施した小学校英語活動実施状況調査結果（平成 17 年度）によると、全国の 93.6%の公立小学校が英語活動を実施している。本県においても、同調査において第 6 学年の 95.5%が実施しているとの回答がある。

しかし、その実態を分析すると、取組内容に相当のばらつきが見られ、学年の発達段階等に配慮した指導目標や指導内容、評価計画等を明確に位置付けたカリキュラムを基に実施しているとはいえない状況である。研究指定校や先進実践校の実践発表等はあるものの、その成果と課題を十分に分析・共有して指導に役立てていくことは今後の課題とされている。また、実際の指導に当たっても、授業の進め方や効果的な指導法について、学級担任及び担当教員が手探りしながら進めている現状がある。指導者が身に付けるべき英語指導力の具体化や校内研修への位置付け等、英語活動の実践的指導力を高めるための取組が十分に進んでいないことが要因として考えられる。

このような状況を改善するには、まず、先行研究や実践事例を基に、本県の小学校英語活動における指導内容及び評価計画等をまとめ、モデルカリキュラムとして示す必要がある。さらに、このモデルカリキュラムを活用して、具体的な英語活動の進め方や A L T の活用方法などの実践的指導方法を身に付けるための校内研修プログラムを確立することが必要である。そして、指導者が自信をもって指導に当たったり、自ら指導方法を工夫したりできる力を高めることが大切である。

そこで、この研究は、小学校英語活動におけるモデルカリキュラムと校内研修プログラムを作成し、各学校における活用を図ることで、小学校英語活動の充実と英語活動指導者の指導力向上に役立てようとするものである。

## 研究の方向性

本県の小学校英語活動の充実と英語活動指導者の指導力向上に資するため、本県における小学校英語活動のモデルカリキュラムを作成すると共に、実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムを作成し、提示する。

## 研究の年次計画

この研究は、平成 19 年度から平成 20 年度にわたる 2 年次研究である。

### 第 1 年次（平成 19 年度）

先行研究の分析及び学習指導要領改訂に向けた審議状況を踏まえながら、本県の小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点を検討する。また、小学校教員の実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件を明らかにする。

### 第 2 年次（平成 20 年度）

第 1 年次の研究を基に、モデルカリキュラムと校内研修プログラムを作成する。これを研究協力校において活用し、英語活動の実践及び校内研修の推進を支援する。そして、実践結果の分析を基に、校内研修プログラムの有効性及び小学校英語活動モデルカリキュラムの妥当性を検討し、それぞれの修正を行う。

## 本年度の研究内容と方法

### 1 研究の目標

本県の小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点及び小学校教員の実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件を明らかにする。

## 2 研究内容与方法

### (1) 小学校英語活動推進に関する基本的な考え方の検討（文献法）

小学校英語活動実施状況調査及び学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会の審議状況を踏まえて、小学校英語活動推進についての基本的な考え方を検討する。

### (2) 小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点の検討（文献法）

先行研究の分析を基に、本県的小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点を検討する。

### (3) 教師の実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件の検討（文献法）

小学校英語活動を推進するために、教員に求められる資質や効果的な研修方法等について検討し、実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件を明らかにする。

## 研究結果の分析と考察

### 1 小学校英語活動推進に関する基本的な考え方

#### (1) 小学校英語活動の現状

平成 18 年 12 月に文部科学省が実施した小学校英語活動実施状況調査によると、【表 1】のように英語活動を実施した学校は全国で 95.8%，岩手県で 99.8%となっている。この実施率は前年度と比較して全国で 2.2 ポイント、岩手県では 0.9 ポイント増加している。小学校高学年で週 1 回程度の実施が中央教育審議会の外国語専門部会で検討される中、小学校英語に対する関心がよりいっそう高まっていることが伺える。

【表 1】英語活動の学年別実施状況（平成 18 年度）

(%)

学年	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	全体
全国	79.0	79.8	89.7	90.7	91.6	93.4	95.8
岩手県	90.3	90.0	98.4	98.1	96.8	97.9	99.8

しかし、【表 2】の年間実施時間数をみると、多くの学校で実施時数は月 1 回に満たないことが分かる。小学校第 6 学年において、年間 23～35 時間及びそれ以上実施していると解答した学校の割合は、全国で約 2 割、岩手県では 1 割程度に過ぎない。そのため、小学校英語活動の週 1 回程度の実施となった場合、多くの学校でカリキュラムを早急に整備する必要に迫られる。このことから、各校での実施がスムーズに行えるよう、モデルカリキュラムを提示する必要があると考える。

【表 2】小学校第 6 学年の英語活動の年間実施時間数（平成 18 年度）

(%)

実施時数	1～3	4～11	12～22	23～35	36～70	71 以上
全国	11.1	42.7	25.7	16.8	3.6	0.1
岩手県	18.3	54.9	16.2	10.7	0	0

また、英語活動の主たる指導者は、全国の調査も岩手県においても、学級担任が 9 割以上を占める。しかし、研究授業の実施や授業見学等の実施率は低く、英語活動についての校内研修体制は十分に機能しているとはいえない状況である。このことから、校内研修プログラムを作成し、全ての小学校で英語活動についての研修が実施できるよう、条件整備をする必要があると考える。

【表 3】英語活動等における研究授業等の実施状況（平成 18 年度）

(%)

項目	研究授業の実施	教員同士の授業見学	指導方法等の教員間打合せ
全国	13.0	22.3	65.5
岩手県	5.3	14.1	69.9

(2) 中央教育審議会外国語専門部会の審議状況から

平成 18 年 3 月 31 日の中央教育審議会教育課程部会において、外国語専門部会は、小学校の英語教育に共通の教育内容を設定する場合の方向性について、【資料 1】のように検討内容を報告した。

【資料 1】小学校の英語教育に関する外国語専門部会の審議状況（平成 18 年 3 月 31 日報告）

**小学校における英語教育の必要性**

- ・小学生の柔軟な適応力を生かすことが可能
- ・グローバル化への進展への対応
- ・教育の機会均等の確保

**目標・内容等**

英語活動を通して、

コミュニケーション能力の向上を図る。

言語や文化についての理解を深める。

その際、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを目指す。

国語力の育成を含め広い意味での言語能力を高める内容を設定。

併せて中・高の内容の改善を図り、聞くこと、話すことなどの実践的コミュニケーション能力の充実に努める。

**教育課程上の位置付け**

【小学校高学年】

- ・「領域」または「総合的な学習の時間」としての位置付けを検討。
- ・例えば、週 1 回（年間 35 時間）程度の実施について検討。

【小学校中学年及び低学年】

- ・「総合的な学習の時間」及び「特別活動」等の中で充実。
- ・教育内容や授業時間数等の扱い等については引き続き検討。

**指導者、教材・教具等の教育条件整備**

（指導者）

- ・小学校教員と ALT 等（留学生や英語に堪能な地域人材など）によるチーム・ティーチングを基本とする方向で検討。

（教材・教具）

- ・導入段階では、国において、教材及び教師用指導資料を作成。
- ・ICT を積極的に活用。（遠隔教育に関する研究開発を推進）

（条件整備）

- ・小学校の英語教育の充実に、指導者や教材・教具などの教育条件の整備が必須の課題。

さらに、平成 19 年 11 月 7 日に中央教育審議会教育課程部会がまとめた「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」においては、教育内容に関する主な改善事項の一つに「小学校段階における外国語活動（仮称）」を取り上げており、基本的に、上記の報告を踏襲した内容となっている。

このうち、教育課程上の位置付けについて、「総合的な学習の時間とは別に高学年において一定の授業時数（年間35単位時間、週 1 コマ相当）を確保する一方、教科とは位置付けないことが適当」としている。また、同資料の総合的な学習の時間に関する改善事項に、「小学校において、国際理解に関する学習を行う際には、問題の解決や探究的な活動を通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるように配慮する」という記述が見られる。このことから、高学年における週 1 回相当の外国語活動（仮称）必修化の方針が確認されたほか、従来

の総合的な学習の時間の枠組みの中で各校が取り組んできた英語活動についても、内容について配慮が必要ではあるが、継続して取り組むことが可能であると考えることができる。

次に、外国語活動の目標や内容にかかわって、以下のような記述を行っている。

我が国においては、外国語教育は中学校から始まることとされており、現在、中学校においてあいさつ、自己紹介などの初歩的な外国語に初めて接することとなる。しかし、こうした活動はむしろ小学校段階での活動になじむものと考えられる。また、中学校外国語科では、指導において聞くこと及び話すことの言語活動に重点を置くこととされているが、同時に、読むこと及び書くことも取り扱うことから、中学校に入学した段階で4技能を一度に取り扱う点に指導上の難しさがあるとの指摘もある。

こうした課題等を踏まえれば、小学校段階で外国語に触れたり、体験したりする機会を提供することにより、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地をつくることが重要と考えられる。

一方、外国語のいわゆるスキルの習得に関しては、例えば、聞くことなどの音声面でのスキルの高まりはある程度期待できるが、実生活で使用する必要性が乏しい中で多くの表現を覚えたり、細かい文構造に関する抽象的な概念について理解したりすることを通じて学習への興味・関心を持続することは、小学生にとっては難しいことから、むしろ、A L Tの活用等を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成等を基本とすべきとの指摘がある。

このため、小学校段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動（仮称）を行うことが適当と考えられる。（中略）

このような外国語活動（仮称）を行うに当たっては、身近な場面やそれに適した言語や文化に関するテーマを設定し、A L Tの活用等を通して、英語でのコミュニケーションを体験させるとともに、場面やテーマに応じた基本的な単語や表現を用いて、音声面を中心とした活動を行い、言語や文化について理解させることを基本とすることが適当である。

なお、日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることは、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせることにつながるものであり、国語に関する能力の向上にも資するものと考えられる。

このことから、小学校外国語活動の目標や内容について、次のようにまとめることができる。

**【位置付け】**

- ・中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地をつくるもの

**【ねらい】**

- ・言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うこと

**【目標】**

- ・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する
- ・国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深める

**【内容】**

- ・身近な場面やそれに適した言語や文化に関するテーマを設定し、A L Tの活用等を通して、英語でのコミュニケーションを体験させる
- ・場面やテーマに応じた基本的な単語や表現を用いて、音声面を中心とした活動を行い、言語や文化について理解させる

**【留意点】**

- ・中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではない
- ・スキルの習得を第一義とするものではない
- ・国語に関する能力の向上にも資するものである

さらに、指導者については「学級担任（学校の実情によっては担当教員）を中心に、A L Tや英語が堪能な地域人材等とのチーム・ティーチングを基本とすべき」という方針が示された。しか

し、本県の実情を見ると、必ずしもALTや地域人材が十分とはいえない状況も見受けられることから、実際の実施にあたっては何らかの工夫が必要になってくると考える。

また、「小学校における外国語活動（仮称）を通じて培われた一定の素地を踏まえて、中学校における外国語教育では、『聞く』『話す』『読む』『書く』という4技能のバランスのとれた育成がなされるよう見直しを図る必要がある」など、小学校と中学校が緊密に連携を図ることの重要性についても指摘している。これは、基本的には中学校側が小学校での成果を受けてどのように指導を見直していくかということが主であるが、一方で、中学校英語教育への円滑な移行を促すために、小学校外国語活動の内容や指導方法について検討することも必要であると考え。

以上のような審議状況を基にして、本県における小学校英語活動のモデルカリキュラム及び校内研修プログラムを作成する視点について、検討することとする。また、今後示される予定の学習指導要領の告示内容との整合を図りながら、さらに検討・修正を加えていく。

## 2 小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点

### (1) 本県における小学校英語教育（英会話等）調査研究等の結果から

岩手県が参加する地方分権研究会がベネッセコーポレーションと共同開発した小学校英語活動の学習教材を用いて、平成16～18年度に県内4小学校においてカリキュラム開発の研究を行った。各校2年間ずつの指定で、指導用CD-ROMと児童用ワークブックを活用し、「総合的な学習の時間」における国際理解教育の一環として、歌、ゲーム、ごっこ遊び等の英語活動を年間30時間程度で系統的に実施する中で、開発教材の活用や学習のねらいに関する事、指導方法や人材活用に関する事、指導計画の作成や評価項目、規準、方法等に関する事について研究が進められた。

開発教材「English Stadium Super step1~4」は、指導用CD-ROMと児童用ワークブックで構成されている。CD-ROMには、キャラクターの動画が英語音声と共に納められ、ワークブックを用いながら、児童が英語の歌を歌ったり、英語を聞いてクイズに答えたり、活動のモデルを見て同じように活動したりすることができる。単元という構成はなく、指導者が歌やゲーム等の活動を選択しながら授業を構成し、年間をとおしてスパイラルに学習できるように工夫している。指導用CD-ROMには年間30時間実施の場合のモデルが提示されており、教師の授業中の指示等を含めた毎時間の活動展開案もある。

各小学校の研究報告書及び本研究の研究協力員等からの聞き取り調査から、特に本教材を用いたカリキュラム開発について、成果と課題を【表4】のようにまとめた。

【表4】本県共同開発教材を活用したカリキュラム開発に関する研究の成果と課題

成果	課題
<p>指導用CD-ROM、活動細案があり、特にこれから英語活動を始める学校にとっては、教師が負担なくすぐに取り組める</p> <p>これまでの英語活動の蓄積がある学校においては、ねらいに応じて必要な部分を選択して活用することで、より効果的に活動が進められる</p> <p>ゲームは繰り返し行われるものが多く、年間時数によって調節しながらカリキュラムを編成できる</p> <p>ネイティブの音声、ユーモアのあるキャラクター、迫力ある映像等、視聴覚教材の利点が活動に生かされている</p>	<p>指導者がねらいを明確にしないと、活動をこなすことに終始する恐れがある</p> <p>ねらいや児童の実態に応じて、活動を選択したり自校開発教材や他教科と関連させたりするなどの工夫が必要である</p> <p>発達段階に応じた内容や指導方法の工夫が必要である（特に高学年）</p> <p>ゲーム等をとおしたスキル習得に適しているが、活動で慣れ親しんだ英語表現を実際に使ってみる場の創出が必要である</p> <p>機材（PC、プロジェクタ、スクリーン等）の整備が必要である</p> <p>評価内容や方法について、今後さらに検討する必要がある</p>

(2) 先行研究によるカリキュラムの分析

本県における研究成果に加えて、全国からいくつかの先行実践研究を基にしたカリキュラムを取り上げて分析し、それぞれの特長をモデルカリキュラム作成の視点に盛り込むこととする。なお、先行研究を取り上げる視点として次の3点を考慮した。

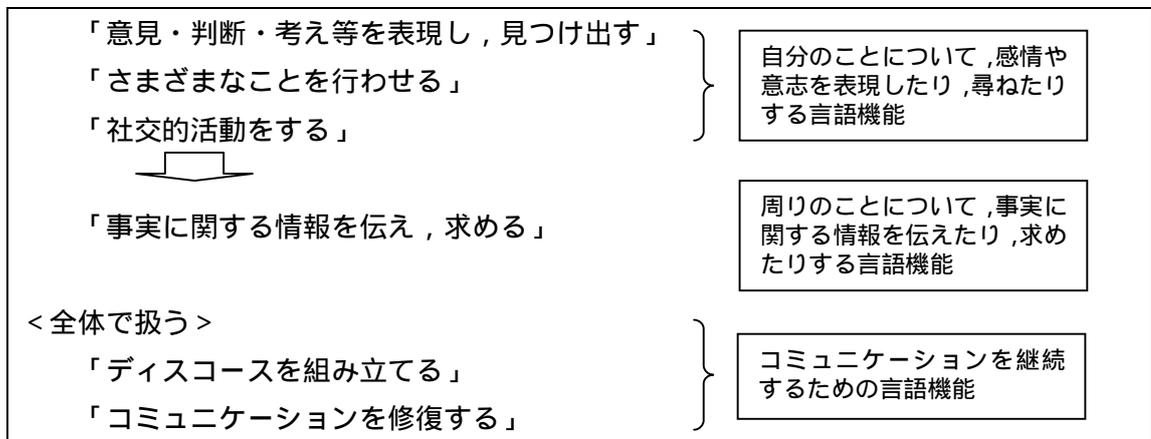
- ・既に実践として取り組まれているカリキュラムが基になっていること
- ・スキル重視ではなく、中央教育審議会の審議内容の方向性に沿った内容であること
- ・高学年において、年間30～35時間程度のカリキュラムが計画されていること

ア 京都市教育委員会「小学校英語活動指導計画と活動事例集」について

(ア) 言語機能を軸にしたカリキュラム編成

現在、各校で作成されている指導計画は、「買い物」などの場面や「色・数字」などのトピックを基に編成されているものがほとんどである。しかし、こうした場面やトピックは無数にあるため、海外旅行や在外勤務といった明確な目標がある場合は別だが、どれを選択しどのように配列するかという指針を得ることは難しい。

この点について、京都市のカリキュラムでは、先行研究から言語機能を六つに分類し、これを母語習得の過程に重ね合わせて、以下のような配列を提案している。



この配列の有効性についてはまだ今後の考察が必要であるが、少なくとも、小学校英語のねらいがコミュニケーションへの態度を育てることにあることを考えると、何のためにコミュニケーションをしようと思うのかというコミュニケーションの目的、すなわち言語機能（言葉の働き）を軸にカリキュラムを編成するという提案は、傾聴に値する。

(イ) 言語材料（取り扱う表現）への配慮

活動計画には、それぞれの単元で取り扱う語彙や基本表現を示すことが一般的である。京都市の場合は、取り扱う表現について、聞いて理解できればよいものと児童に発話させたい表現を明示している。コミュニケーションの内容の豊かさを求めるあまり、児童に過度の負担がかかる活動が散見される現状を振り返ると、このような配慮は大切な視点である。

(ウ) ねらいに応じた活動の分類

英語活動にはさまざまな種類の活動がこれまでも数多く紹介されている。それぞれの活動について、形態や扱う内容によって分類されることがこれまでは多かった。京都市の計画では、英語の音やリズムに慣れるための「歌・チャンツ」、同じ表現を何度も聞いたり、口真似たり、覚えて話してみたりすることによって、表現に慣れ親しむことをねらった「ゲーム・クイズ」、慣れ親しんだ表現を使って、実際に何かを行ってみる（課題を解決する）「タスク」と、それ

それぞれの活動のねらいに応じて分類している。

(E) 「タスク」の設定と、そこにつなげる補助的な活動による単元構成

歌やゲームで終わっては、子どもたちにコミュニケーションを体験させたことにはならない。京都市のカリキュラムには、各単元の目標として、慣れ親しんだ表現を用いて何かを行うというタスクが設定されている。そして、単元で扱う歌やゲーム等の活動の内容が、そのタスクのための補助的な活動として構成されている。

(オ) 各学校が選択できるカリキュラム

単元計画というと、普通、第一時から最終時まで、どのように活動を展開するのかという計画が示される場合が多い。しかし、京都市の場合には、単元で扱う複数の活動と標準時数が示され、これをどのように選択・構成して授業を行うかは各校に任されている。各校によってこれまでの英語活動の取組状況や児童の実態が違う場合、このような弾力的な運用が可能な形でカリキュラムを提示することは重要である。

イ 仙台市立東二番丁小学校「My English」について

(ア) 「学びの軌跡」としてのカリキュラムづくり

はじめにカリキュラムありきではなく、教師と子どもが向き合い、そこから生まれた実践を記録として残し、カリキュラムとして積み上げている。モデルや当初計画のとおり進めるというスタンスではなく、目の前の子どもがどうなのかを常に意識しながら、教師の創意で活動を作り上げようという姿勢が大切である。

(イ) 授業づくりの五つのエレメント（構成要素）

上記のような教師の創意工夫を支えているのが、この授業づくりの五つの要素であろう。

【コミュニティ作りの視点】

子どもどうしの関係性作りを授業の要素として取り入れることである。コミュニケーションは人間関係が土台であり、信頼感、安心感、かかわる楽しさがあってこそ成り立つ。そのために授業では、意味のある、楽しく達成感のあるアクティビティを取り入れる。

【オリジナリティの視点】

言葉が言葉として機能するためには子どもにとって必然性や意味のある表現活動でなければならない。既存の教材ではなく、子どもの個性や創造性を生かし、聞きたい、話したいという自己表現意欲が高まるようなオリジナリティあふれる教材やアクティビティを取り入れる。

【協力活動・グループワークの視点】

友達と助け合い協力して活動し、達成感を味わうことによって学習意欲が高まり、信頼感や他者尊重感がはぐくまれる。英語活動の授業でも、協力して取り組む活動スタイルや学習活動を取り入れる。

【自己表現を高める視点】

英語を媒体として自己表現する方法を工夫し、その場を設定する。どの子も「伝えたい、伝えることが楽しい」と感じ、また友達の表現にもじっと耳を傾ける。自己肯定感や他者理解にもつながる。一人一人の子どもが言葉を大切に自己表現を喜んで行っている。

【既習内容を生かす視点】

学んだことを次の授業で生かす。日常生活の中で生かす。英語で表現することに積極的になる。活動のための英語ではなく、コミュニケーションの道具としての英語を生かしていくような視点を取り入れる。あいさつや日常の簡単な応答、スキットや劇作りなどに生かす。

これらは、英語教育という縦軸の発想ではなく、小学校教育という横軸からの発想として、どの授業にも共通して重要な視点といえる。改めて確認し、大切にしていきたい。

(ウ) 「言葉」の学習としての位置付け

英語活動を「言語学習の一つ」ととらえることについては、中央教育審議会の答申等でも繰り返し述べられている。東二番丁小学校では、以下のことを大切にしながら実践を行っている。

「言葉」を人と人をつなぐ媒体、道具として大切にしたい。  
 「相手のことをよく聞く」態度を大切にしたい。  
 「自分のことを言いたい、伝えたい」意欲・態度を大切にしたい。  
 必然性があり、意味のあるやりとりを大切にしたい。  
 自己表現活動を通して、自己肯定感や他者への関心を高めたい。

これらの視点は、コミュニケーションへの態度を評価したり、コミュニケーションの内容について吟味する際に、ぜひ大切にしたい視点である。

ウ 福岡県教育センター「国際感覚を身に付け、実践的コミュニケーション能力の基礎を培う小学校英語活動プログラムの開発」について

福岡県教育センターの資料の特長は、どの小学校にも一律のモデルを示すのではなく、各校の英語活動実施状況に応じて、モデルとなるカリキュラムを3種類示したことである。本県においても、各校の英語活動の取組状況について相当のばらつきが予想されることから、各校の実態に応じたモデルを提示するという考え方は大変参考になる。

以上ア～ウの分析を基に、それぞれのカリキュラムの特長をまとめたのが【表5】である。

【表5】先行研究における小学校英語活動のカリキュラムの特長

カリキュラム	カリキュラムの特長
京都市 教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話題や場面ではなく、言語機能を軸にカリキュラムを編成している</li> <li>・ 「児童に期待されるアウトプット」と「インプットされる主な表現」を明示</li> <li>・ 言語習得の過程を考慮し、「歌・チャンツ」、「ゲーム・クイズ」、「タスク」と活動を分類している</li> <li>・ 各単元のタスクとして設定した活動を単元の目標とし、各単元のそれぞれの活動で使用する言語材料（語彙，表現）が関連するようにする</li> <li>・ 各単元の展開は、各校が実態に応じて活動例を選択して構成する</li> </ul>
東二番丁 小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ はじめにカリキュラムありきではなく、教師と子どもの実態に即した実践の足跡を記録しながら英語活動のカリキュラムとして積み重ねてきている</li> <li>・ 授業に必要な要素・側面として五つのエレメントを提示している                         <ul style="list-style-type: none"> <li>ア コミュニティづくり（子ども同士の人間関係づくり）</li> <li>イ オリジナリティ（子どもにとって必然性や意味のある表現）</li> <li>ウ 協力活動・グループワーク</li> <li>エ 自己表現を高める</li> <li>オ 既習内容を生かす</li> </ul> </li> <li>・ 英語活動を「言葉」の学習として位置付けて実践している</li> </ul>
福岡県 教育センター	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各校の英語活動の実施状況を自己診断させた上で、3タイプのカリキュラム作成を提示している                         <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 初めて取り組む際の「月別トピック型」</li> <li>イ 教科や行事等と関連を図る「関連型」</li> <li>ウ 学校教育目標との整合を図り評価規準を明示した「発展型」</li> </ul> </li> </ul>

(3) 国の示す共通教材等との関連について

先に触れた中央教育審議会による「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」の中で、小学校外国語活動（仮称）について、国として各学校において共通に指導する内容を示すと共に、共通教材を提供することの必要性について述べている。これに先立ち、平成19年8月30日の中央教育審議会教育課程部会小学校部会で示された「小学校英語に関する資料」の中に、【表6】のような指導内容の試案が示されている。また、このとき併せて、共通教材として作成予定の英語ノート（仮称）の内容例も示されている。

【表6】小学校における英語活動に関する指導内容（一部）のイメージ（試案）

	言語の使用場面 言語の働き	テーマ	扱う題材 (言語・文化)	扱う表現例	扱う語彙例
1	挨拶/挨拶をする, 挨拶の動作	世界の「こんにちは」	世界の様々な挨拶	Hello, Guten Tag. Bon jour. 안녕하세요	挨拶, 動作
2	自己紹介/好みを伝える	自分を知ってもらおう	自己紹介の仕方	My name is .... I like apples.	動物, 果物, スポーツ
3	日常生活/事実を尋ねる	身近なものを説明してみよう	いろいろなものの名前(英語/日本語)	What's this? It's an eraser.	動物, 食べ物, 身の回りの物
4	日常生活/報告する	何時に起きるの?	自分たちの生活と世界の子どもの生活	What time do you get up?	動作, 時間
5	遊び/事実を描写する	一緒に遊んでみよう	世界の数遊び	How many?	遊び, 遊び方, 数え方
6	買い物/好みを伝える	着てみたい服を伝えよう	日本と世界の服装	I like red.	色, 形
7	日常生活/気持ちを伝える, 身振り手振りで伝える	ジェスチャーを知ろう	様々なジェスチャー	I'm happy.	動作, 感情
8	食事/好みを尋ねる	何が食べたいの?	日本と世界の食べ物	What would you like?	料理, 注文
9	道案内/相手に正しく伝える	どのように行くの?	道案内の仕方	Where is the flower shop? Turn right.	建物, 方向, 位置
10	スピーチ/考えを述べる, 伝える	将来, 何になりたいの?	世界の子どもの夢	I want to be a cook.	職業

この試案には、国語や日本の文化への理解を深めるための題材が意図的に盛り込まれていると考えられる。これまで、英語活動や国際理解教育というと、外国の言葉や文化について知ることになりがちであった。しかしこの試案からは、外国との比較から日本の言葉や文化について改めて気付きを促したり、外国に発信すべき内容について児童の考えを耕したいとのねらいが伺える。こうしたねらいを受け止めながら、児童の興味・関心を基にした、発達段階に応じた活動をどう創出するかが、今後の課題といえる。

また、小学校においては、中学校・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地をつくることが重要とされている。しかし、中学校段階の英語教育の前倒しではなく、どのような内容や指導方法が中学校への円滑な移行につながるのか、現段階では明らかにされていない。このことは、小学校における外国語活動の内容や指導の実態を十分踏まえた中学校英語の指導内容の一層の充実・改善と同様、これから明らかにしていかなければならない課題である。

(4) モデルカリキュラム作成の視点

前述のとおり、小学校英語活動の推進に当たっては、単にねらいを示すだけでなく、そのねらいを達成するための具体的なカリキュラムを提示することが必要である。モデルとするカリキュラムには、目標、指導内容の他、指導法、教材、評価等についても盛り込まれる必要があると考える。

これまでの検討内容を基に、モデルカリキュラムを作成する視点を、【資料2】にまとめた。

#### 【資料2】小学校英語活動のモデルカリキュラム作成の視点

##### 視点 各校の状況や児童の実態に応じて選択可能なカリキュラム

- ・これまで英語活動をどの程度実施してきたかによって、指導内容や実施時期等のある程度選択できるようなカリキュラムを提示する
- ・これから初めて高学年で英語活動に取り組む学校でもスムーズな導入が図られるように、活動の進め方、必要な教材、評価についても提示する

##### 視点 目標に応じた活動内容の設定

- ・言葉をとおして人とかかわることの楽しさを実感したり、言葉や文化に対する気付きにつながったりするような内容を工夫すると共に、スキルの習得が第一義とならないよう配慮する
- ・英語教育である前に、小学校教育の一環であるという視点を大事にして授業を構想する

##### 視点 言語機能を重視したシラバスの設定

- ・「買い物」「道案内」のような場面シラバスでなく、「好き嫌いを伝える」「依頼する」「情報を聞き出す」等の言語機能をまず考え、それに沿って具体的場面や話題を選択し、シラバスを構成する
- ・一つの言語機能（「依頼する」ための表現）が、いろいろな場面で使われることを実感できるように、場面や話題を工夫する
- ・同じ表現を繰り返し扱ったり、同じ機能を持つ表現を次第に増やしたりする

##### 視点 活動タイプの吟味：表現に慣れ親しむ活動から課題解決型の活動へ

- ・各単元に、目標となるような課題解決型の活動（タスク）を設定する
- ・言語習得の過程を配慮した流れとなるよう、最初は英語を聞いて体を使って反応させる活動や聞いて口真似る活動を多く取り入れ、次第に英語が口に出るよう段階的に指導する
- ・ゲームなど、同じ語彙や表現を何度も繰り返して聞いたり、口にしたりする活動をとおして慣れ親しんだ表現を用いて、ポスター制作や学校紹介など、意味のある課題に取り組む
- ・英語の音やリズムに触れる活動（歌、チャンツなど）は、基盤作りとして継続的に取り組む

##### 視点 児童の実態に応じた題材・内容

- ・児童の興味・関心や生活の様子に応じたり、学校行事や他教科の内容と関連を図ったりした題材を選定する
- ・児童の発達段階を踏まえた学習内容や指導方法を工夫する
- ・活動の豊かさを求めるあまり、児童に過度の負担がかかる内容にならないよう配慮する

##### 視点 英語活動の評価

- ・目標に沿って、具体的な児童の姿をイメージした評価規準を作成する
- ・「できる・できない」ではなく「～しようとしている」というプロセスを重視して評価したり、児童の気付きを取り上げて評価したりするなど、評価の視点を示す

##### 視点 コミュニケーション能力の素地をつくる

- ・小中連携の具体的な姿として可能な活動内容について検討していくと共に、中学校における指導の改善の方向性を提示する（研究のまとめとして）

### 3 教師の実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件

#### (1) 英語活動指導者として、小学校学級担任に求められる資質（目指す教師像）

小学校英語活動の指導は、学校の実情によっては専科等の担当教員が行うこともあり得るが、基本的には学級担任が中心となり、ALTや英語が堪能な地域人材等とのチーム・ティーチングで行う方向で検討されている。小学校英語活動は、英語のスキルを身に付けさせることを第一のねらいとするものではなく、児童に英語を使ったコミュニケーションを体験させることをとおして、異なる言葉や文化に関心をもち、積極的コミュニケーションを図ろうとする態度を育てることにある。そのため、児童にとって興味・関心のある活動を設定し、また、英語に対する不安を取り除くことが大切である。これらを実現させるには、児童一人一人のことをよく理解し、児童にとって身近な存在である学級担任が指導に当たることが適切と考えられる。

英語活動における学級担任の役割として、以下の内容があげられる。

- ・学校で作成した指導計画を基に、学級の実態に合う指導案や教材等を作成する
- ・英語を積極的に使うモデルとなる
- ・児童の英語に対する不安を取り除く
- ・ALT等との授業において、適切な指示や指名等を行い、授業をマネジメントする
- ・児童のつまずきに適切に支援し、ALTと児童との英語のギャップをうめる（通訳ではない）
- ・授業の目標に沿った評価を行い、児童の意欲や自信を高めるフィードバックを行う
- ・保護者に英語活動のねらい、目標、学習内容等を知らせる

このような役割を果たすため、小学校学級担任に求められる資質を、次の3点と考える。

- 英語活動のねらいや指導方法について理解している
- 児童と共に英語活動の授業を楽しんでいる
- 英語活動の授業改善についての見通しをもつことができる

一つ目は、授業者として当然必要なことである。ねらいを見失ってしまうと、授業がその場限りのものになってしまったり、必要以上にスキルの習得を児童に求めて英語嫌いをつくってしまったりする恐れがある。また、ねらいが明確でないと、適切な評価もできない。

二つ目は、小学校の中で英語活動が根付いていくために、とても大切な視点である。小学校教員のほとんどは、「英語活動の授業をする」ことを前提に教員になっているわけではない。中には、英語に対して児童以上に不安を抱え、「英語を教えるなんてとんでもない」と感じている教員も少なくないだろう。しかし、児童以前に、教員がそのような「心のバリア」をつくってしまったら、児童に積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育つはずがない。学級担任は英語の専門家・モデルではなく、英語を使おうとするモデルになればよい。児童と共に英語活動を楽しもうという姿勢が、大前提として必要である。

三つ目は、学級担任が児童の実態に応じた授業づくりを進める上で、大切な視点である。最初は、英語活動といっても、何をすればよいかも、どう授業をすればよいかも分からず、先進校や同僚の行った授業を見よう見まねでスタートするかも知れない。しかし、授業のねらいや進め方が分かってくるうちに、「もっと、こうしたらどうだろう」「自分の学級の児童なら、こういう教材の方がいいのではないか」など、いろいろなアイデアがわくようになり、授業への意欲も高まってくるものと考えられる。

以上のことから、この三つの資質を高めるような研修の在り方について検討することとする。

## (2) 実践的指導力の向上を図るための教員研修の在り方

### ア 校内研修の必要性

英語活動について、小学校教員の実践的指導力の向上を図るためには、英語活動を校内研修に位置付けて取り組んでいくことが必要である。数日間の外部研修は、新たな知識・情報を得たり、自己研修への意欲付けの契機としては有効である。しかし、それぞれの学校の実情や児童の実態に応じながら、日々の授業をどうするかについて考え、教員同士が知恵を出し合いながら研修を深め、学級の児童の指導に直接還元していくという校内研修のサイクルでこそ、実践的指導力が高まっていくと考える。また、英語活動は、高学年担任等、学校の一部の教員だけが研修すればよいのではなく、教員全員がかかわり合いながら研修を深めていく必要がある。新たに必修化が検討されている小学校英語活動に対するさまざまな不安や心配を解決し、活力ある授業を展開するためにも、校内研修の充実が大変重要である。

### イ 校内研修の運営について

平成 19 年 10 月に、教員研修センター等が実施した「小学校における英語活動等国際理解活動指導者要請研修」の資料によると、校内研修の運営方法について次の 3 点が大事であると指摘している。

校長のリーダーシップによる校内組織の確立と校内研修の位置付け 中核教員の研修 教員の実態把握と必要とされる研修内容の検討
--

一つ目は、新しい領域である小学校英語教育を学校経営のどこに位置付けるかという視点である。全教職員が一丸となって指導力向上を目指し、校内研修体制の確立のため、統率力のある研修責任者を指名し、その教員を学校あげてサポートする体制づくりが必要となる。

二つ目の中核教員とは、校内研修の鍵を握る研修責任者のことであるが、詳細については次項で述べることとする。

三つ目は、現職教員のニーズや学校としてのこれまでの英語活動の実績等を踏まえた上で、必要な研修を選択し、校内研修に位置付けていくということである。

### ウ 中核教員研修について

校内研修の責任者として、中核教員に求められるのは、大きくいえば「校内研修のプランニング力」と「英語活動に関する指導力」の二つである。前者は、校長、教頭の指導のもと、校内研修の年間計画、研修内容、研究授業等について教務主任や研究主任と協議しながら、研修のプランニングを行う。後者については、小学校英語活動のねらいや指導方法について紹介したり、ときには模範授業を提供するなど、校内の英語活動の指導力向上の先頭に立つことが期待される。

このような中核教員を全ての小学校に位置付けるため、文部科学省は各地方自治体の教育委員会に対し、中核教員研修を実施するよう求めている。

中核教員研修の内容として、主に次の内容が必要と考える。

小学校英語活動のねらいを徹底すること カリキュラム作成の視点をもつこと 校内研修の内容や方法について構想をもつこと 英語活動の具体的な指導方法と評価について、体験的に理解すること A L T との共同作業等により、英語運用能力の向上を図ること
---

このほか、実際に先進校等に出向いて授業研究を行ったり、各校の中核教員同士が交流する時間を設けて、中核教員のネットワークをつくってお互いに連絡が取り合えるようなシステムを構築したりすることも大切である。また、各校の実情に応じて、一部の研修内容を選択できるようにする配慮も必要である。

このように、各校における小学校英語活動推進の鍵を握る中核教員を支援するため、どのように校内研修を進めればよいかという参考資料として、校内研修プログラムを作成・提示することが、モデルカリキュラム作成と併せて、本研究の大きなねらいの一つである。

### (3) 校内研修プログラムの内容

校内研修プログラムは、校内研修計画作成の手順と、一つ一つの研修内容及びその進め方、研修資料等から構成される。研修内容は、各校で必要な内容を選択したり、実情に応じて内容を変更したりしながら研修を実施する。

校内研修プログラムに盛り込まれるべき内容として検討しているものを、【資料3】にまとめた。

#### 【資料3】小学校英語活動の校内研修プログラムの内容

小学校英語活動の基本的な考え方

- ・ねらい、目標、内容等
- ・自校における目指す児童像の確認、具体化  
自校カリキュラムの検討
- ・モデルカリキュラム等を基に、自校のカリキュラムについて検討
- ・目標に沿った評価規準、評価方法について検討  
英語活動の指導法
- ・活動の種類と指導上の留意点
- ・ゲームやチャンツの演習
- ・新たな活動の紹介
- ・教材づくり  
授業研究
- ・授業を見る視点
- ・師範授業（中核教員等によるモデル授業）と追試（そっくり真似てみる）
- ・計画的な研究授業
- ・効果的な授業研究会の進め方
- ・授業力向上を目指した教員のポートフォリオづくり  
英語運用能力の向上
- ・クラスルームイングリッシュ（英語による指示、いろいろなほめ言葉）
- ・ALTとの共同作業（ALTと一緒に教材づくりなど、何か活動を行う）
- ・教師のための発音上達ワンポイントレッスン  
英語活動の効果の検証、保護者への説明
- ・児童の振り返りシートの活用
- ・児童、保護者へのアンケートの実施

今後、これらの内容について、具体的な中身や校内研修推進上の留意点について検討した上で、校内研修プログラムの試案を作成する。

## 研究のまとめ

### 1 研究の成果

この研究は、小学校英語活動におけるモデルカリキュラムと校内研修プログラムを作成し、各学校における活用を図ることで、小学校英語活動の充実と英語活動指導者の指導力向上に役立てようとするものである。第1年次のこれまでの研究の結果、成果としてあげられるのは次の点である。

#### (1) 小学校英語活動推進についての基本的な考え方について

小学校英語活動実施状況調査から、小学校英語活動推進のために、モデルカリキュラムと教員研修のための校内研修プログラム作成の必要性について確認した。また、学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会の審議状況を踏まえて、小学校英語活動についての基本的な考え方を確認した。

#### (2) 小学校英語活動モデルカリキュラム作成の視点について

本県等の参加による共同開発教材を用いたカリキュラム開発研究の成果と課題及び他県での先行研究におけるカリキュラムの特長について分析した。さらに、今後国が示す予定の共通教材等との関連について、現時点での情報を基に検討した。これらを踏まえて、小学校英語活動モデルカリキュラムの作成にかかわって、「各校の状況や児童の実態に応じて選択可能なカリキュラム」「目標に応じた活動内容の設定」「言語機能を重視したシラバスの設定」など、七つの視点を示した。

#### (3) 教師の実践的指導力の向上を図るための校内研修プログラムの要件について

英語活動指導者として、小学校学級担任に求められる資質を3点あげ、その資質向上のために必要な教員研修の在り方について検討した。その上で、教員の実践的指導力向上を図るための校内研修プログラムの要件について検討した。

### 2 今後の課題

第2年次は、本年度の研究を踏まえながら、今後示される予定の学習指導要領及び小学校外国語活動（仮称）の指導内容、共通教材等の内容について検討を加え、本県における小学校英語活動のモデルカリキュラム及び校内研修プログラムの試案を作成する。これらを基に、研究協力校を設定した上で、授業実践及び校内研修を推進し、校内研修プログラムの効果とモデルカリキュラムの妥当性について検討する。

<おわりに>

この研究を進めるに当たり、研究協力員としてご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。

## 【引用文献】

- 中央教育審議会(2006),「小学校段階における英語教育に関する教育内容(試案)」,『参考資料』,中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会(第39回(第3期第25回))配付資料
- 中央教育審議会(2007),「小学校における英語活動に関する指導内容(一部)のイメージ(試案)」,『小学校英語に関する資料』,中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会小学校部会(第4期第1回)配付資料
- 中央教育審議会(2007),『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』,pp.62-64

## 【引用 Web ページ】

仙台市立東二番丁小学校 <http://www.sendai-c.ed.jp/~nibancho/2006/fskounaiken.html>

## 【参考文献】

- 伊藤嘉一・編著(2003),『小学校英語学習指導指針 各学年の目標及び内容』,小学館
- 大井恭子・スワンピター・須田昌義・他著,地方分権研究会教育ワーキング小学校英語教材開発研究会・慶應義塾大学グローバルリサーチセンター研究所・ベネッセコーポレーション未来教育センター小中学校事業部・共同監修・開発,『English Stadium Superstep1~4』,ベネッセコーポレーション
- 岡 秀夫,金森 強・編著(2007),『小学校英語教育の進め方「言葉の教育」として』,成美堂
- 小川隆夫(2006),『先生,英語やろうよ!』,松香フォニックス研究所
- 小川隆夫(2007),『先生,英語やろうよ!2 高学年のための小学校英語』,松香フォニックス研究所
- 影浦 攻(2007),『新しい時代の小学校英語指導の原則』,明治図書
- 金森 強・編著(2003),『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』,教育出版
- 菅 正隆(2007),「地方自治体における小学校英語研修とその課題・体制の構築」,『平成 19 年度小学校における英語活動等国際理解活動指導者養成研修講師資料』
- 北上市立江釣子小学校(2006),「英語活動において,英語に親しみ,楽しむ子供の育成 学級担任主導による ALL ENGLISH 活動をとおして」,『平成 17・18 年度小学校英語教育研究校研究報告書』
- 久慈市立長内小学校(2006),「豊かなコミュニケーション能力をもつ子どもの育成 英語活動の実践をとおして」,『平成 17・18 年度小学校英語教育研究校研究報告書』
- 田尻悟郎(2006),「小学校での英語教育の意義と課題」,大津由紀雄(編著)『日本の英語教育に必要なこと - 小学校英語と英語教育政策』,慶應義塾大学出版会
- 直山木綿子(2006),「小学校英語の必要性の主張のあとに必要なこと」,大津由紀雄(編著)『日本の英語教育に必要なこと - 小学校英語と英語教育政策』,慶應義塾大学出版会
- 東野裕子,高島英幸(2007),『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』,高陵社書店
- 日向速人・紫波町立古館小学校(2006),「英語に親しみ,進んで英語を楽しもうとする児童の育成 視聴覚教材を活用した英語活動をとおして」,『平成 17 年度岩手県教育研究発表会資料・生活/総合的な学習の時間分科会』
- 福岡県教育センター(2005),『国際感覚を身に付け,実践的コミュニケーション能力の基礎を培う小学校英語活動プログラムの開発~自校プログラムの充実に向けた新しい視点と方法~』
- 山下一幸・一戸町立鳥海小学校(2006),「国際感覚をもち,進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成 英語活動(英会話等)における人との関わり合いをとおして」,『平成 17 年度岩手県教育研究発表会資料・生活/総合的な学習の時間分科会』

## 【参考 Web ページ】

京都市教育委員会 小学校英語活動指導計画と活動事例集(試案)

[http://www.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/curri\\_c/es\\_eng/sampleplans/index.html](http://www.edu.city.kyoto.jp/sogokyoiku/curri_c/es_eng/sampleplans/index.html)